

(注 第二章)

- (1) 「臨時教育會議官制ヲ定ム」(JACAR(アジア歴史資料センター) Ref:A13100240300「公文類聚・第四十一編・大正六年・第二巻・官職一・官制一」(内閣)内務省)国立公文書館所蔵。
- (2) 「御署名原本・大正六年・勅令第百五十二号・臨時教育會議官制制定教育調査会官制廃止」(JACAR(アジア歴史資料センター) Ref:A03021108300「御署名原本・大正六年・勅令第百五十二号・臨時教育會議官制制定教育調査会官制廃止」国立公文書館所蔵)。
- (3) 天野郁夫『大学の誕生(下)―大学への挑戦―』(中央公論新社、二〇〇九年)二八七―二八九頁。
- (4) 同右、二八九―二九〇頁。
- (5) 「各種調査委員会文書・臨時教育會議書類・二ノ一速記録綴自第一号至第十号」(JACAR(アジア歴史資料センター) Ref:A05021030500「各種調査委員会文書・臨時教育會議書類・二ノ一速記録綴自第一号至第十号」国立公文書館所蔵)。
- (6) 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第五巻(教育資料調査会、一九三八年)四六四―四六五頁。
- (7) 同右、四七二頁。
- (8) 「大学令及高等学校令」(JACAR(アジア歴史資料センター) Ref:A0303374600「枢密院審査報告・大正六年―大正七年」国立公文書館所蔵)。
- (9) 前掲『明治以降教育制度発達史』第五巻、四七九―四八二頁。
- (10) 同右、四八三―四八四頁。
- (11) 同右、五一四―五一六頁。
- (12) 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第六巻(教育資料調査会、一九三八年)三二七―三三二頁。
- (13) 前掲『明治以降教育制度発達史』第五巻、五一七―五一八頁。
- (14) 前掲『大学の誕生(下)―大学への挑戦―』三八五―三八六頁。
- (15) 同右、三八六頁。
- (16) 同右、二〇七―二〇八頁。
- (17) 同右、三八八―三九〇頁。
- (18) 同右、三九一―三九五頁。
- (19) A Step Forward in TOKYO by the reverend H. St. George Tucker, M.A., SM, November 1907, pp.907-908 (立教学院史資料センター編『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成(抄訳付)』第三巻、立教学院、二〇一一年、一九三―一九四頁所収)。
- (20) 松平惟太郎『聖公会神学院史』(『神学の声』第三巻第一号、一九五六年六月)七頁。
- (21) 井深梶之助『基督教教育の前途』(『開教五十年記念講演集 附祝典記録』宣教開始五十年記念会事務所、一九〇八年二月)七四頁。
- (22) 同右。
- (23) 大西晴樹『キリスト教大学設立運動と教育同盟』(『基督教学校教育同盟百年史紀要』創刊号、二〇〇三年六月)三五―七〇頁。
- (24) 「合同キリスト教大学」は Union Christian College or University in Japan の日本語表記であり、「連立キリスト教大学」は federated Christian College or University in Japan の日本語表記である。
- (25) The Greatest Chance in Japan by Galen M. Fisher, SM, March 1911, p.218 (前掲『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成(抄訳付)』第三巻、三九五頁所収)。

- (25) 石坂正信「基督教主義聯合大学の設立に対する青山学院の立場」(『青山学院校友会会報』第一八号、一九一三年一月、青山学院史資料センター所蔵。青山学院一五〇年史編纂本部・編纂委員会・青山学院資料センター一五〇年史編纂室編『青山学院一五〇年史』資料編Ⅰ、学校法人青山学院、二〇一九年、二一八頁所収)。
- (26) 前掲「キリスト教大学設立運動と教育同盟」五〇頁。
- (27) 「合同基督教大学設立計画之次第概要」(一九一九年、青山学院史資料センター所蔵。前掲『青山学院一五〇年史』資料編Ⅰ、二七〇～二七二頁所収)。この際、同志社大学を有するアメリカン・ボードもキリスト教合同大学構想に反対した。
- (28) 同右、二七一～二七二頁。
- (29) 良山(元田作之進)「立教大学の抱負」(『基督教週報』第三五卷第一六号、一九一七年六月一日)一頁。
- (30) Progress at Saint Pauls College, Tokyo. By the Reverend Charles S. Reinlander, LL. D., President. SM, October 1917, pp.683-684 (立教学院史資料センター編『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成(抄訳付)』第四卷、立教学院、二〇一三年、一四二～一四三頁所収)。
- (31) 「沿革概略」(『立教学院立教大学要覧 大正八九年』一九一九年五月、立教池袋中学校高等学校史料室所蔵)一二頁。
- (32) 同右、一八頁。
- (33) 「設立の趣意」(前掲『立教学院立教大学要覧 大正八九年』三～四頁)。
- (34) 『基督教週報』(第四一巻第一五号、一九二〇年六月一日)六頁。
- (35) 「熊本医科大学、立教大学、竜谷大学、大谷大学専修大学ヲ学令ニ依リ設立スル件ヲ裁可セラル」(JACAR(アジア歴史資料センター) Ref:A13100580600「公文類聚・第四十六編・大正十一年、第二十二巻・軍事・陸軍・海軍・学事・学制・学資・雑載」国立公文書館所蔵)。
- (36) 同右。
- (37) 「立教大学設立ノ件」(「公文 大正十一年 学事」私立学校冊の60)東京都公文書館所蔵。
- (38) 「立教大学設立認可申請書」(立教学院史資料センター所蔵)。
- (39) 前掲「立教大学設立ノ件」。
- (40) 日本大学百年史編纂委員会『日本大学百年史』第二巻、日本大学、二〇〇〇年)七五頁。
- (41) 「東京商科大学備教師英国人ジョージ、エドワード、ラックマン、ガントレット勲章加授ノ件」(JACAR(アジア歴史資料センター) Ref:A10113020100「叙勲裁可書・大正十四年・叙勲巻五・外国人」国立公文書館所蔵)。
- (42) 『第一高等学校一覽 自大正十一年至大正十二年』(第一高等学校、一九二二年)一二四頁。
- (43) 前掲「熊本医科大学、立教大学、竜谷大学、大谷大学専修大学ヲ学令ニ依リ設立スル件ヲ裁可セラル」。
- (44) 前掲「立教大学設立ノ件」。
- (45) 「大学設立認可ニ関スル文部省専門学務局ヨリノ通牒」(「公文 大正十一年 学事」私立学校 冊の63)東京都公文書館所蔵。『立教学院百二十五年史』資料編第一巻、立教学院、一九九六年、

- 二八〇～二八一頁所収)。
- (46) 前掲「熊本医科大学、立教大学、竜谷大学、大谷大学専修大学ヲ大学令ニ依リ設立スル件ヲ裁可セラル」。
- (47) 「立教大学消息」(「基督教週報」第四五卷第二二号、一九二二年六月三日) 一〇頁。
- (48) 同右。「大学より」(「立教 立教校友会々報」第五卷第二号、一九二二年七月) 五頁。
- (49) 「立教大学学則中変更認可」(「学則、規則に関する許認可文書・大学」昭47文部0012100 国立公文書館所蔵)。
- (50) 同右。
- (51) 「大正拾貳年参月 学則 立教大学」(前掲「立教大学学則中変更認可」)。
- (52) 前掲「立教大学学則中変更認可」。
- (53) 前掲「大正拾貳年参月 学則 立教大学」。
- (54) 前掲「立教大学学則中変更認可」。
- (55) 前掲「大正拾貳年参月 学則 立教大学」。
- (56) 前掲「立教大学学則中変更認可」。
- (57) 前掲「大正拾貳年参月 学則 立教大学」。
- (58) 同右。
- (59) 『官報』第三二〇一号(一九一九年二月四日) 一頁。
- (60) 「立教大学学長外五件認可願」(「公文 大正十一年 学事」私立学校 冊の62」東京都公文書館所蔵)。
- (61) 前掲「立教大学学則中変更認可」。
- (62) 前掲「大正拾貳年参月 学則 立教大学」。
- (63) 同右。
- (64) 同右。
- (65) 前掲「立教大学学則中変更認可」。
- (66) 同右。
- (67) 同右。
- (68) 「立教大学授業料変更認可」(前掲「学則、規則に関する許認可文書・大学」)。
- (69) 天野郁夫『高等教育の時代(上)―戦間期日本の大学―』(中央公論新社、二〇一三年) 二八五頁。
- (70) 同右、四〇二～四〇八頁。
- (71) 前掲「熊本医科大学、立教大学、竜谷大学、大谷大学専修大学ヲ大学令ニ依リ設立スル件ヲ裁可セラル」。
- (72) 文部大臣官房文書課編『日本帝国文部省年報第五一』下巻(文部省、一九二七年) 附録七〇頁、文部大臣官房文書課編『日本帝国文部省年報第五二』下巻(文部省、一九二八年) 附録七三～七六頁。
- (73) 文部大臣官房文書課編『日本帝国文部省年報第四九』下巻(文部省、一九二五年) 附録五八頁。
- (74) 文部大臣官房文書課編『日本帝国文部省年報第五〇』下巻(文部省、一九二六年) 附録六四頁。
- (75) 文部大臣官房文書課編『日本帝国文部省年報第四八』(文部省、一九二三年) には、附録がなく、各校の在籍者数などは把握できない。
- (76) 前掲「立教大学設立ノ件」。
- (77) 前掲「立教大学学長外五件認可願」。
- (78) 前掲『明治以降教育制度発達史』第五卷、五一五頁。

- (79) 前掲「立教大学学長外五件認可願」
- (80) 同右。
- (81) 前掲『高等教育の時代(上)―戦間期日本の大学―』二二七―二二八頁。
- (82) 同右、三九九頁。
- (83) 立教大学資料室「立教大学諸申請書・認可書綴(1)」(立教学院史資料センター所蔵)。
- (84) 「教員の呼称変更」(『立教 立教校友会々報』第六卷第一号、一九二三年一月) 五頁。
- (85) 「教授会創起」(前掲『立教 立教校友会々報』第六卷第一号) 五頁。
- (86) 「諸規程綴」立教大学。
- (87) 同右。
- (88) 同右。
- (89) 「立教大学諸規程(内規)(写)」(立教学院史資料センター所蔵)。
- (90) 「遠山郁三日誌」一九四一年五月二日条(『遠山郁三日誌』一二四頁)。
- (91) 『立教学院一覽』(立教学院史資料センター所蔵) 一―二頁。ここで一九〇二年発行と推定した理由については第一編第三章第五節注(196)を参照のこと。
- (92) 「須藤吉之祐氏事務所長に再任」(『立教大学新聞』第六三三号、一九二八年四月一四日) 二面。
- (93) 『ST. PAUL'S COLLEGE (RIKKYO DAIGAKU) 1915-1916』p.6.
- (94) 「本庄季彦氏事務所長を退く」(『立教大学新聞』第六二三号、一九二八年三月五日) 三面。
- (95) 私立立教学院立教大学『立教学院立教大学要覽』(一九一七年三月、立教学院史資料センター所蔵) 一四頁。
- (96) 前掲『立教学院立教大学要覽 大正八九年』一四頁。
- (97) 前掲「須藤吉之祐氏事務所長に再任」。
- (98) 「立教大学教職員給与表―仮題―I」一九〇七―一九三三』立教学院史資料センター所蔵。
- (99) 『基督教週報』(第一九卷第二号、一九〇九年七月三日) 一四頁、『基督教週報』(第二九卷第八号、一九一四年四月二四日) 一六頁。
- (100) 「療養の甲斐なく河田止也氏逝去」(『立教大学新聞』第七二号、一九二八年二月五日) 五面。
- (101) 「文部省当局に呈す」(『立教大学新聞』第七号、一九二四年一月二四日) 一面。
- (102) 「築地だより」(『立教 立教校友会々報』第一卷第五号、一九一九年五月) 五頁。
- (103) 前掲「立教大学教職員給与表―仮題―I」一九〇七―一九二二頁)。
- (104) 同右。
- (105) 前掲「立教大学設立ノ件」。
- (106) 「事務所の整理」(『立教 立教校友会々報』第五卷第四号、一九二二年一月) 五頁。
- (107) 「常務委員会組織変更」(前掲『立教 立教校友会々報』第六卷第一号) 五頁。
- (108) 「大学行政の基ノ幹部会」(『立教大学新聞』第三一三号、一九二六年四月二五日) 三面。

- (109) 「映画研究会公認保留に遇ふ」〔立教大学新聞〕第三号、一九二五年二月一日、七面。
- (110) 前掲「立教大学授業料変更認可」。
- (111) 「就職斡旋の詮衡委員会生る」〔立教大学新聞〕第五九号、一九二七年二月五日、三面。
- (112) 前掲「須藤吉之祐氏事務所長に再任」。
- (113) 「六課制施かれて職制整理に一段落」〔立教大学新聞〕第九〇号、一九三〇年八月一日、二面。
- (114) 前掲「諸規程綴」。
- (115) 同右。
- (116) 同右。
- (117) 前掲「立教大学諸規程（内規）（写）」。
- (118) 「金子尚一先生に聞く」（一九八八年二月九日）『別冊英米文学 英米文学科のあゆみ——戦前より一九八〇年代まで』（一九九一年三月、初出『英米文学』四九号、一九八九年）一頁。
- (119) 菅円吉「私の歩んだ道」〔立教〕第六〇号、一九七一年三月）二六頁。
- (120) 「森脇先生聞き取り」（立教学院史資料センター所蔵）七三頁。
- (121) 以下、金子尚一「大正後期の立教学院」〔回顧九十年・わが師わが友 わが学園〕聖公会出版、一九九一年、一〇七―一五頁。
- (122) 「愈々決定を見た学部卒の卒業論文——発表が遅いと憤慨の向が多い」（『立教大学新聞』第四一号、一九二六年九月一日）一面。
- (123) 文学部で卒業論文の非必修化は一九五八年度からであった（『文学部卒業論文問題決る／提出は任意に／英米・社会学科は来年度から／基督・史学・心理は従来通り』立教大学新聞』第一三七号、一九五六年二月二〇日、一面）。
- (124) 「寄宿舎を改造／階上に研究室／階下に学生控室も新設」〔立教大学新聞〕第一一九号、一九三三年一月二三日、三面。
- (125) 「卒業論文提出終わる」〔立教大学新聞〕第一一九号、一九三三年一月二三日、三面。
- (126) 高垣松雄「築地から池袋へ」〔英語青年〕第七六卷第九号、一九三七年二月、二九六頁。嘉納が校長だったのは一九八八年六月二〇日まで。「当時の学長」という表現だが、元田は立教大学の校長。
- (127) 金子尚一「根岸由太郎先生」（前掲『回顧九十年』二〇〇頁）。略年譜もあり。
- (128) 「立教大学英語評判記」〔英語世界〕第三卷第六号、一九〇九年五月、四八頁。前掲『立教大学要覧（大正八―九年）』一五、一七頁。
- (129) 一八九〇―一九四三年。立教中学・専修学校出身、米国ケネディン大学古典科卒、一九〇七年エル大学院専攻卒業、帰国後は実業にも関わる。平山育男「旧山本有三邸施主であった清田龍之助について」〔日本建築学会計画系論文集〕第七三卷第六二九号、二〇〇八年七月、一六二六―一六二七頁。
- (130) 金子によれば「厚木の素封家」。金子尚一「よい古い時代」〔英米文学研究室〕第二号、一九六七年五月、一二頁。
- (131) 前掲「よい古い時代」二頁。金子は一九二五（大正一四）年三月卒業。
- (132) 高垣松雄「ロウエル女史の詩風」（『アメリカ文学』研究社、一九二七年）。後藤昭次「高垣松雄と大正末期日本のアメリカ文学」

(立教大学アメリカ研究所編『アメリカ研究シリーズ 日本に於けるアメリカ文学研究の先駆者たち』—高垣松雄を中心に) 第三号、一九七八年三月、二〇頁所収。

(133) 金子尚一「高垣松雄さんのこと」(前掲『回顧九十年』二二七頁)。

(134) 津田亮一「重たいふろしき」(『英米文学研究室』第二号、一七頁)。津田亮一は一九三七年入学。

(135) 英九朗「英文科風景」(『立教学院学報』第一卷九月号、一九三四年)一〇頁。

(136) 立教女学校校長。

(137) 武藤重勝「哲学科に就いて」(『立教学院学報』第一卷一〇月号、一九三四年)一二頁。

(138) 「躍進する研究室」(『立教学院学報』第六卷第一号、一九四〇年一月)二面。

(139) 菅岡吉「立教人物列伝(四) 杉浦貞二郎先生への追憶」(『立教』第一六号、一九六〇年三月)七頁。

(140) 「懸案の哲学科長は愈々管教授と決定／近く哲学科教授会催さる」(『立教大学新聞』第三三三号、一九二六年五月一日、三面)。ちなみに管は人気があつたらしく、一九二七年七月一〇日の記事には、「何でもないよ／平々坦々サ／井上しな子女史と結婚する 哲哲学科長の微笑み」(『立教大学新聞』第五五号、一九二七年七月一〇日、三面)。昔は、学科長兼副学科長だった。

(141) 前掲『立教学院立教大学要覧』一九一七年三月、一八頁。

(142) J.S. Moroda, *Christian Education for Young Men in Japan, the Department of Missions of the Protestant Episcopal Church, 1921,*

May 14th, JR, Box 137, AEC.

(143) *Ibid.*

(144) 前掲「立教大学設立認可申請書」。

(145) 英国教会 (The Church of England) からはハイチャーチとよばれるカトリック的傾向を強くも C S A G (The Society for the Propagation of the Gospel) と、福音主義的傾向を有する C M S (The Church Missionary Society) が日本での宣教を担った。後にカナダ聖公会も宣教師を派遣する。

(146) 松平惟太郎「聖公会神学院史」(『神学の声』第三卷第一号、聖公会神学院、一九五六年六月)九頁。

(147) 同右、一二頁。

(148) 大江満「立教大学と聖公会神学院の二重学籙制度」(江島尚俊・三浦周・松野智章編『戦時日本の大学と宗教』大正大学総合仏教研究所叢書第三二巻)法藏館、二〇一七年)二〇九頁参照。

(149) 前掲「聖公会神学院史」一二頁。

(150) 「私立専門学校則中変更ノ件(案) 聖公会神学院設立者、聖公会教育財団、昭和三年二月九日起案」(『自大十三年七月 京都専門学校 関東学院 聖公会神学院 第二四一―二六冊』所収、「学則、規則に関する許認可文書・専門学校」昭47文部001701007 国立公文書館所蔵)。

(151) 前掲「聖公会神学院史」一二頁。

(152) 当初は一九二四年の設置を予定していたらしい(ただし野々村の回想による)。「立教大学史学会小史」立教大学史学会、一九六七年、一一頁)。戦前の史学科については、小澤実「小林秀雄の時代—戦前戦中の立教史学科、史学会、『史苑』」(小澤実・佐藤

雄基編『史学科の比較史——歴史学の制度化と近代日本』勉誠出版、二〇二二年。

- (153) 「年譜」(立教大学文学部史学研究室編『面影 小林秀雄先生追悼録』立教大学文学部史学研究室、一九五七年) 二頁。
- (154) 「愈々充実する史学科の内容」(『立教大学新聞』第一四号、一九二五年四月五日) 三面。
- (155) 野々村戒三「築地時代の追憶(上)」(『立教学院学報』第一卷九月号、一九三四年九月) 五頁。
- (156) 「本年度出の柴田君／予科教授に抜擢／在学中秀才の誉高く／小林史学科長に認められて」(『立教大学新聞』第六九号、一九二八年九月二十五日) 三面。
- (157) 鈴木勇一郎「立教関係者一名の追放とその後」(『立教学院史研究』第一五号、二〇一八年二月) 三二頁。
- (158) 「英文日本史を編むと／初声も高い史学会／新進の史学科教授を網羅して研究発表や史学講演会を開く／望み多い同会の前途」(『立教大学新聞』第三二号、一九二六年五月五日) 三面。
- (159) 「全学後援の下に『米史研究会』生る／史学会を中心勢力に成り期待さる」(『立教大学新聞』第四六号、一九二六年一月二五日) 三面。
- (160) 「大学設立認可ニ関スル件依命通牒」一九二二年五月二六日(『大正十一年 学事』私立学校 冊の63) 東京都公文書館所蔵。『立教学院百二十五年史』資料編第一巻、立教学院、一九九六年、二八〇～二八一頁所収。
- (161) 久保田富次郎「本学商学部／現状の一斑」(『立教大学新聞』第二九号、一九二六年三月一五日) 一面。

(162) 「研究方針決まる／経済学研究会／来学期の講義」(『立教大学新聞』第八号、一九二四年二月五日) 一面。

- (163) 「経済学研究会の解散」(『立教大学新聞』第六号、一九二四年一月五日) 一面。なお、史料ではマルキシズムは「マルキンブム」とある。
- (164) 諸井忠一・田辺邦彦「立教大学経済学会十年史」(『立教大学経済学会誌』第一八号、創立十周年記念特別号、一九四〇年二月) 一三〇頁。
- (165) 「恐慌!!を呼ぶ社会へ門出する新学士／人事係りも一安堵か／案外に良い其の後の就職状況」(『立教大学新聞』第二九号、一九二六年三月一五日) 三面。
- (166) 「卒業論文提出成績不良／文学部は皆無」(『立教大学新聞』第八五号、一九三〇年一月一五日) 二面。
- (167) 「輝く栄光の本学に飛躍の秋来る／文、商学部長の新任を見／新興の気溢る学園」(『立教大学新聞』第八七号、一九三〇年四月一五日) 二面。
- (168) 一九〇七年八月二九日文部省告示第二七号(『官報』第七二五一号、一九〇七年八月二九日)。
- (169) 「沿革概略」(前掲『立教学院立教大学要覧』一九一七年三月、一頁)。
- (170) 一九一九年四月七日に大学予科を二年制とする認可を取得(久保田富次郎「立教大学小史 未定稿」、『立教学院百二十五年史資料編』第一巻、五九頁所収)。一九一九年の立教大学学則は、立教池袋中学校・高等学校史料室所蔵の前掲『立教大学要覧(大正八一九年)』に見られる。

なお、一九〇〇年度から一九四二年度の『文部省年報』は、当該年度の三月一日時点の調査データを掲載しているが、その「公立専門学校別一覧」に掲載された「私立立教学院立教大学」を見る限りでも、一九一八年度を扱った第四六年報下巻（一九一八年四月～一九一九年三月）では、予科の修業年限は一年であるが、一九一九年度を扱った第四七年報下巻（一九一九年四月～一九二〇年三月）では、予科は二年へと変更している。

(171) 一九二二年五月二五日文部省告示第四三四号（『官報』第二九四四号、一九二二年五月二七日）。

(172) 「立教大学々則中変更認可」一九二四年二月一〇日申請、一九二四年四月一日結了（立教大学 自大正一三年四月至昭和二二年五月 第一三冊一所収、国立公文書館所蔵）。この申請書類には、変更前の一九二三年三月の学則と、申請した一九二四年四月の学則の両方が綴られている。

(173) ただし、立教大学の学部と予科で中等学校教員免許の指定を受けた最初は一九二五年一月二日文部省告示第一二二号（『官報』第三七二三号、一九二五年一月二日）であり、一九二四年時点ではまだ指定を受けていない。

(174) 一九一九年三月二九日文部省令第八号「高等学校規程」（『官報』第一九九四号、一九一九年三月二九日）では、高等学校高等科文科の第一学年に数学三時間、第一外国語を第一学年九時間、第二学年八時間、第三学年八時間の計二五時間、第二外国語については基本的に三年間毎学年で四時間の計一二時間が配当されていた。資料2-1-2参照のこと。

(175) 一九二五年一月二日文部省告示第一二二号（『官報』第三七二

三号、一九二五年一月二日）。

(176) 一九一九年三月二九日文部省令第八号「高等学校規程」第二九条（『官報』第一九九四号、一九一九年三月二九日）で「公立又ハ私立ノ高等学校ノ教員数並専任教員及兼任教員ノ割合ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ定ムヘシ」とされた。この具体的な割合を示す法令や通牒についての詳細は現時点では不明であるが、有資格教員と無資格教員の割合については、一九一九年三月二九日文部省令第一〇号「高等学校教員規程」第一三条（『官報』第一九九四号、一九一九年三月二九日）において「高等学校高等科ニ於テハ教員数ノ三分ノ一以内ヲ限り高等科教員免許状ノ有セザル者ヲ以テ教員ニ充テルコトヲ得」と明記された。

(177) 「教員免許台帳（高等学校・無試験）一の一〇二 大正十二年度」（国立公文書館所蔵）。なお、これより前にすでに高等学校高等科教員免許状を取得していた予科教員もいたと考えられるが、ここでは省略する。

(178) 「立教大学大学予科教員数及専任兼任ノ割合ニ関スル件」（立教学院史資料センター所蔵）。

なお、学部と大学予科両方の専任教員として両方の講義を担当することは行なわれていたが（たとえば、一九三〇年代後半の『立教大学一覽（昭和十三年四月）』では、根岸由太郎、本莊季彦、辻莊一らが学部と予科両方の専任となっており、特に根岸は文学部、経済学部、予科のすべて専任欄に名前を連ねている）、学部と大学予科の専任教員ついて、申請書類上、重複した人物を申請することが認められていたのか否かの詳細については、現時点では不明である。

(179) 「教員免許台帳(高等学校・無試験) 一〇三 昭和四年度」(国立公文書館所蔵)。

(180) 『日本帝国文部省第四十九年報 自大正十年四月至大正十一年三月』下巻附録五八頁。「公立大学及専門学校別」覧。この一覧の数値は一九二二年三月一日現在の調査によるもの。

(181) 一九二四年三月一日現在数を掲載した『日本帝国文部省第五十一年報 自大正十二年四月至大正十三年三月』上巻では、大学令による大学としての立教大学の学部と予科を合わせた教員数は七十二名(うち外国人教員八名)であり、大学予科では有資格教員一五名(うち外国人教員一名)、無資格教員一三名(うち外国人教員三名)であった。さらに一九二五年三月一日現在数には(日本帝国文部省第五十二年報 自大正十三年四月至大正十四年三月)上巻、学部・予科教員計八五名(うち外国人教員七名)とあり、大学予科の有資格教員二二名(うち外国人教員一名)、無資格教員七名(うち外国人教員二名)であった。その後、一九二五年度から一九二七年度までは学部・予科合計の教員数は(外国人教員を合わせて)八九名あるいは九〇名で推移し、大学予科教員数も二八名あるいは二九名となった。前掲注(178)の「立教大学大学予科教員数及専任兼任ノ割合二関スル件」では、一九二四年七月時点で、立教大学予科の高等学校規程第二九条による教員数は二九名となっていた。

(182) 私立大学の大学予科については江津和也によるいくつかの先行研究があり、特にその修業年限については江津和也「大学令にもとづく大学予科の修業年限について」(『清和大学短期大学部紀要』第四一号、二〇一三年一月)の中で、立教大学、東京慈恵会医科

大学、日本医科大学、立命館大学、同志社大学、関西大学の事例をあげた検討を行なっている。

(183) 前掲「大学令にもとづく大学予科の修業年限について」。

(184) 当該年度の『文部省年報』による。

(185) 「立教大学々則、予科生徒定員、予科教員定数変更並仮校舎建設認可」一九二七年一月二八日申請、一九二七年三月二日結了(立教大学 自大正十五年三月至昭和十一年五月 第一冊)所収、国立公文書館所蔵。

(186) これは、大学予科三年制への変更申請の書類(同右「立教大学々則、予科生徒定員、予科教員定数変更並仮校舎建設認可」)の中の学科課程であり、一九二七年度の立教大学要覧が現時点では未発見であるため、厳密には一九二七年度に実施された学科課程であるかどうかは断定できない。

(187) 同右「立教大学々則、予科生徒定員、予科教員定数変更並仮校舎建設認可」。

(188) 「東京府經由 立教大学学部、予科生徒定員、予科教員定数変更並仮校舎建設認可」の中の「大学予科定員増加認可申請書」一九二八年二月二五日申請、一九二八年三月一四日結了(立教大学 自大正十五年三月至昭和十一年五月 第一冊)所収、国立公文書館所蔵。この申請書中で、「近年文科志望者々々多数」になつてきたことにより文科定員の増員が必要である旨が説明されている。

(189) 文部省専門事務局「高等諸学校統計」(野間教育研究所図書室所蔵)の昭和三年十二月(一九二八年一月二五日発行)、昭和四年五月一日現在(一九二九年一月二八日発行)、昭和五年五月一

日現在（奥付欠）、昭和六年五月一日現在（一九三二年二月一日発行）、昭和七年五月一日現在（一九三三年二月一日発行）、昭和八年五月一日現在（一九三三年二月一日発行）、昭和九年五月一日現在（一九三四年一月二日発行）、昭和十年五月一日現在（一九三五年二月一日発行）、昭和十一年五月一日現在（一九三六年二月一日発行）、昭和十二年五月一日現在（一九三七年二月一日発行）。

(190) 同右書の昭和三年十二月（一九二八年二月二日発行）、昭和四年五月一日現在（一九二九年二月八日発行）、昭和五年五月一日現在（奥付欠）、昭和六年五月一日現在（一九三一年二月一日発行）、昭和七年五月一日現在（一九三二年二月一日発行）、昭和八年五月一日現在（一九三三年二月一日発行）、昭和九年五月一日現在（一九三四年一月二日発行）、昭和十年五月一日現在（一九三五年二月一日発行）、昭和十一年五月一日現在（一九三六年二月一日発行）、昭和十二年五月一日現在（一九三七年二月一日発行）、昭和十三年五月一日現在（一九三八年二月一日発行）。

(191) 慶應義塾150年史資料集編集委員会『慶應義塾150年史資料集』基礎資料編2（慶應義塾、二〇一六年三月）二〇六―二〇七頁。大学令による大学に昇格した時点の慶應義塾大学予科の文学部志望者、経済学部・法学部志望者の学科課程。

(192) 「早稲田大学学部、高等学院並専門部、高等師範部及附属早稲田専門学校学則中変更認可」一九二七年二月一〇日申請、一九二七年三月三〇日結了（国立公文書館所蔵）書類中の『大正十五年四月改正 早稲田大学学則』による。

(193) 管見の限り、私立大学の三年制予科の学科課程で第一外国語（英語）の授業時数が突出して多かったのは、一九二五年度から一九三八年度までの法政大学予科第一部（三年生予科）である。一九二四年度には八―八―九で三年間で計二五時間であったが、一九二五年度には一三―一三―一〇の計三六時間配当とする学則が見られるようになり、この三六時間配当が一九三八年度まで続いた。一九三八年度に外国語の授業時数を減ずる変更申請を行ない、この変更で九―一〇―一〇の計二九時間となった（『法政大学 自大十三年五月至昭和十七年一月 第四冊』（国立公文書館所蔵）中の複数の申請書類による）。

(194) 同時期の私立大学予科の学科課程を確認した限り、立教大学予科の「歴史（英）」といった英文テキストによる講義であること を明記したものは他にはなかった。

なお、確認にあたっては、国立公文書館デジタルアーカイブ「学則、規則に関する許認可文書・大学」において、一九三〇年代前半までに大学令による大学となった私立大学の「学則中変更認可」関係文書を対象とし、これらの申請書類の中に綴られた学則（変更申請直前の現行学則となる）とその中の大学予科学科課程の調査を行なった。

(195) 「立教大学大学予科教員数及専任兼任ノ割合ニ関スル件」（立教学院史資料センター所蔵）の添付書類「大正十三年六月 予教科 科書目年度別調 自明治四十年至大正十二年 立教大学」による。「専入指定」や「高入指定」の学校については、一九三三年度までの各『文部省年報』下巻の「指定並認定学校別一覧（私立各種学校）」参照のこと。

- (197) C. M. Williams to Richard B. Duane, 21 February, 1874, JR, Box 22, AEC. 大江満『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯——幕末・明治米国聖公会の軌跡』(刀水書房、二〇〇〇年) 四五〇頁。
- (198) 前掲『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯——幕末・明治米国聖公会の軌跡』四五〇頁。
- (199) 『立教学院一覽』(一九〇二—三年)、『立教学院百二十五年史』資料編第一卷、二二四頁所収)。
- (200) 立教学院八十五年史編纂委員編『立教学院八十五年史』(立教学院事務局、一九六〇年) 一三七頁。
- (201) 前掲『立教学院一覽』(一九〇二—三年) 六三七頁。
- (202) 前田多門「十年前の回顧」、『立教学院学報』第七号、一九二一年) 一八頁、二二頁。
- (203) 「池袋より」(『立教 立教校友会々報』第二号、一九一八年二月) 七頁。
- (204) 「池袋より」(『立教 立教校友会々報』第六号、一九一九年五月五日、六頁)。
- (205) 「池袋原頭語」(『立教 立教校友会々報』一〇月号、一九一九年一〇月) 四頁。
- (206) かつら生「図書館に呈す」(『立教大学新聞』第一〇号、一九二五年一月二〇日。小関昌男編『メーザライブラリー資料集——学生新聞に見る立教大学図書館史』一九九二年、二五頁所収、以下「メーザライブラリー資料集」と表記)。
- (207) 浜田敬一「図書館の将来」(『立教大学新聞』第七号、一九二四年一月二四日。前掲『メーザライブラリー資料集』二二頁)。
- (208) 立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』(再版、立教大学、二〇〇八年) 九二—九三頁。豊田雅幸「立教の学び舎——キャンパスと校舎の移り変わり」(立教学院、二〇一三年) 三七頁。
- (209) 鶴川馨「立教大学図書館」(『立教学院百二十五年史』資料編第一卷、六三二頁所収)。「読売新聞」では「六千円以上を費した銅鉄製の書庫が新に設けられた」と報じている(立教大学図書館の新設備／学生醸金計画)「読売新聞」一九二五年四月一〇日朝刊、四画)。
- (210) 「諸規定(内規)」(立教大学、一九三三年)、『立教学院百二十五年史』資料編第一卷、六三七頁所収)。
- (211) 「校舎配置図並構造、坪数、使用区分等調査二関スル回報ノ件」立教大総長学事務取扱三辺金藏発文部省専門教育局長永井浩宛、一九四三年一月三日(『立教大学庶務課文書』No.201009-029 立教学院史資料センター所蔵)。
- (212) 「校地、校舎調査二関スル件」文部省学校教育局長田中耕太郎宛、一九四六年一月三二日(『立教大学庶務課文書』No.201013-029)。
- (213) 鶴川馨「立教大学図書館学科構想と図書館蔵書」(『立教学院百二十五年史』資料編第一卷、六四三頁所収)。
- (214) "Statistics of St. Paul's University Library, Tokyo, Japan" (「スパックマン・オーヴァン文書」No.13043 立教学院史資料センター所蔵)、『立教学院百二十五年史』資料編第一卷、六四八—六四九頁所収)。
- (215) 伊藤重治郎「図書館の蔵書(上)」(『立教大学新聞』第八五号、一九三〇年一月一日。前掲『メーザライブラリー資料集』六一—六三頁)。

- (216) 前掲「図書館の将来」二二頁。「充実する図書館／和洋名著を網羅して」(『立教大学新聞』第六四号、一九二八年五月一日。同右、四九頁)。
- (217) 「校内図書館の利用」(『ムサシ』)第五号、一九二三年二月二日。同右、一三頁。なお、ここでは「最も完備して居る部門」として宗教のほか、「英文学アメリカ合衆国歴史心理学法律等」が挙げられている。
- (218) 「一千元を醸金して」(『紫雲』)文庫を設置／本年度卒業生的美挙」(『立教大学新聞』第九号、一九二五年一月五日。同右、二三頁)。
- (219) 『立教大学一覽』(立教大学、一九三三年。『立教学院百二十五年史』資料編第一巻、六三三頁所収)。
- (220) 「図書館費を一般学生より徴収」(『立教大学新聞』第四〇号、一九二六年八月二五日。前掲『メーザライブラリー資料集』四一頁所収)。
- (221) 「宗教書二百冊を杉浦氏が図書館へ／洋書の購入は当分駄目」(『立教大学新聞』第一二六号、一九三三年一〇月一九日。同右、八四頁)。
- (222) 「図書館費を一般学生より徴収」(『立教大学新聞』第四〇号、一九二六年八月二五日。同右、四一頁)。
- (223) 「『聖鐘』が募集した本学の不平不満／すべて学生の真の叫び」(『立教大学新聞』第九六号、一九三二年二月一九日。同右、六九頁)。
- (224) 「充実する図書館／和洋名著を網羅して」(『立教大学新聞』第六四号、一九二八年五月一日。同右、四九頁)。
- (225) 「時運に眼醒めて図書館の改善策／六日濱田司書が主唱の図書委員会で決定」(『立教大学新聞』第八九号、一九三〇年六月一日。同右、六六頁)。
- (226) 「学生の要求で盛に図書購入／成績頗る良好な図書購入要求制」(『立教大学新聞』第九四号、一九三〇年二月一日。同右、六七頁)。
- (227) 前掲「校内図書館の利用」一四一―一六頁。
- (228) 吞海沙織「昭和初期の私立大学図書館における図書分類法」(『資料組織化研究』)第五八号、二〇一〇年二〇―二二頁。
- (229) 同右、二八頁。
- (230) 小関昌男「分類法改訂考——初代図書館長スパックマンの分類思想と新座保存書庫の機能」(『立教大学職員紀要』創刊号、一九八三年)一一―一二頁。
- (231) かつら生「再び図書館に呈して猛省を促す」(『立教大学新聞』第二二号、一九二五年二月二〇日。前掲『メーザライブラリー資料集』二七頁)。
- (232) 「図書館の改造／図書館学の提唱」(『立教大学新聞』第六号、一九二四年一月五日。同右、一九頁)。
- (233) 前掲「図書館の将来」二二頁。
- (234) 前掲「図書館の改造／図書館学の提唱」一九頁。
- (235) 「学生の図書館を学生の力で充実させよう／麗はしい愛校心の発露」(『立教大学新聞』第一四号、一九二五年四月五日。同右、二九頁)。
- (236) 「大学の心臓は図書館にあり／アメリカに送つたラツシユ教授の書状」(『英文学書一千冊を米国へ寄贈依頼す／奏効し実現の暁は

- 斯界の権威となる本学図書館」〔立教大学新聞〕第一〇七号、一九三一年二月二日。同右、七三、七四頁。
- (237) 「大学より」〔立教 立教校友会々報〕第六卷第三号、一九三三年七月一日。五頁。
- (238) 諸井忠一「立教学生文化運動小史」〔立教大学経済学会雑誌〕第一四号、立教大学経済学会、一九三九年、一九頁。
- (239) 前掲「図書館の将来」二二頁。
- (240) 前掲「二千元を醸金して」「紫会」文庫を設置／本年度卒業生的美挙」二三頁。「一紫会文庫に就つて／本年度の卒業生も図書寄贈／一紫会の第一回購入書決定」〔立教大学新聞〕第三〇号、一九二六年四月一日。前掲『メーザライブラリー資料集』三八頁。
- (241) 前掲「学生の図書館を学生の力で充実させようと／麗はしい愛校心の発露」二九頁。
- (242) 前掲「一紫会文庫に就つて／本年度の卒業生も図書寄贈／一紫会の第一回購入書決定」三八頁。
- (243) 前掲「学生の図書館を学生の力で充実させようと／麗はしい愛校心の発露」二九頁。
- (244) 同右。
- (245) 「YMCA文庫／図書館に新設さる」〔立教大学新聞〕第二五号、一九二五年二月五日。前掲『メーザライブラリー資料集』三五頁。
- (246) 前掲「図書館費を一般学生より徴収／一学期一円づつ、」四一頁。同右。
- (247) 同右。
- (248) 「大学の図書館は其の計度器／学生の要求を一向に満たさない
- メーサー図書館」〔立教大学新聞〕第五五号、一九二七年七月一日。前掲『メーザライブラリー資料集』四四頁。
- (249) "Library Budget 1938-39" (スパックマン・オーヴァートン文書 No. 13407) および「昭和一四年度図書館費」〔同、No. 13411〕。立教学院百二十五年史「資料編第一巻、六四〇～六四二頁所収。
- (250) 「蔵書乏しき図書館に千葉教授の徳行／寄贈図書百冊に及ぶ」〔立教大学新聞〕第九六号、一九三二年二月一日。前掲『メーザライブラリー資料集』六八頁。
- (251) 前掲「図書館の将来」二二頁。
- (252) 「宗教書二百冊を杉浦氏が図書館へ／洋書の購入は当分駄目」〔立教大学新聞〕第一一六号、一九三二年一月一日。前掲『メーザライブラリー資料集』八四頁。「ラ前総長の美挙／蔵書二千を図書館へ」〔立教学院学報〕第七卷第八号、一九四二年六月七日。同前、一〇〇頁。
- (253) 「岩波から寄贈図書／六十二巻図書館へ」〔立教大学新聞〕第六号、一九二八年六月一日。同右、五二頁。
- (254) 「松竹会社の大谷社長劇本寄贈」〔立教大学新聞〕第一二二号、一九三二年六月二日。同右、八一頁。
- (255) 「世界的専門雑誌三十余种図書館に集る」〔立教大学新聞〕第二七号、一九二六年一月五日。同右、三六頁。
- (256) 「遠山郁三日誌」一九四〇年四月三日条〔遠山郁三日誌〕一三頁。
- (257) 「英文学書一千冊を米国へ寄贈依頼す／奏効し実現の暁は斯界の権威となる本学図書館」〔立教大学新聞〕第一〇七号、一九三一年二月二日。前掲『メーザライブラリー資料集』七四

- (258) 前掲「英文学書一千冊を米国へ寄贈依頼す／奏効し実現の暁は
斯界の権威となる本学図書館」七四頁、「依頼の図書続々到着／
近く充実する図書館書」(『立教大学新聞』第一〇八号、一九三二
年二月六日。前掲『メーザライブラリー資料集』七五頁)。
「続々到着する依頼の書籍／喜んだのは図書館」(『立教大学新聞』
第一〇九号、一九三二年三月一六日。同前、七六頁)。「米国から
本が来た／二百冊を目下整理中」(『立教大学新聞』第一一二号、
一九三二年六月二日。同前、八〇頁所収)。
- (259) 立教大学「昭和六年度私立大学年報(控)」(昭和六年度起学
事年報報告綴(一))。立教学院史資料センター所蔵。
- (260) 立教大学「昭和十年度私立大学年報(控)」(昭和六年度起学
事年報報告綴(一))。
- (261) 立教大学「昭和十五年度私立大学年報(控)」(昭和六年度起
学事年報報告綴(二))。
- (262) 「図書館表 昭和二十年度 立教大学図書館」(昭和六年度起
学事年報報告綴(二))。
- (263) 同右。
- (264) 前掲「諸規定(内規)」六三八頁。
- (265) 立教大学「昭和十六年度私立大学年報(控)」(昭和六年度起
学事年報報告綴(二))。
- (266) 前掲「校内図書館の利用」一四頁。
- (267) 前掲「再び図書館に呈して猛省を促す」二七頁。
- (268) 「貸出図書新規定」(『立教大学新聞』第六五号、一九二八年五月
二七日。前掲『メーザライブラリー資料集』五〇頁)。
- (269) 「お役人気分でない、気なもの／図に乗た図書館員の言動に全学
生ひどく憤慨」(『立教大学新聞』第六七号、一九二八年七月五日。
同右、五三頁)。
- (270) 「図書館規定を改正し校友にも解放／一般学生の研究にも便利
／新図書も多数到着」(『立教大学新聞』第七一号、一九二八年一
一月三日。同右、五五頁)。
- (271) 前掲「諸規定(内規)」六三八頁。
- (272) 前掲「大学の図書館は其の計度器／学生の要求を一向に満たさ
ないメーサー図書館」四四頁。
- (273) 「筆頭は文学書一少ない宗教書／貸出は益々殖える一方／最近
の図書館の調べ」(『立教大学新聞』第七二号、一九二八年一二月
五日。前掲『メーザライブラリー資料集』五六頁)。
- (274) 「図書館ニュース／最近の耳寄りな話」三三(『立教大学新聞』第
六九号、一九二八年九月二五日。同右、五四頁)。
- (275) 前掲「筆頭は文学書一少ない宗教書／貸出は益々殖える一方／
最近の図書館の調べ」五六頁。
- (276) 「多く読まれる横綱は哲学書／文学書の進出を物語る／図書貸
出数調査」(『立教大学新聞』第八八号、一九三〇年五月一五日。
前掲『メーザライブラリー資料集』六五頁)。
- (277) 「時勢を語る社会科学書／没落した哲学もの／本学図書館の調
べ」(『立教大学新聞』第九九号、一九三二年四月二八日。同右、
七〇頁)。
- (278) 「学生吸引策に図書館大奮発／プローズイング・セクションを
備ふ」(『立教大学新聞』第一一五号、一九三二年九月二二日。同
右、八三頁)。

- (279) 「警笛」頭を悩ます図書館策」(『立教大学新聞』第一一七号、一九三二年一月一七日。同右、八五頁)。
- (280) 「図書館の夜間開放／日土を除く毎夜八時半まで」(『立教大学新聞』第八二号、一九二九年九月二三日。同右、五九頁)。「大人気の夜間開館」(『立教大学新聞』第八二号、一九二九年十月一日五日。同前、六〇頁)。
- (281) 「夜間開館は廃止／利用者僅小のため」(『立教大学新聞』第八五号、一九三〇年一月十五日。同右、六四頁)。
- (282) 「警笛」夜の図書館」(『立教大学新聞』第二二三号、一九三三年五月二十五日。同右、九一頁)。
- (283) “How the Library is used in the Evening” (“スバックマン・オーヴァトン文書”No.13410)。「立教学院百二十五年史」資料編第一巻、六三六頁所収。ただし、資料集での資料名として記載されている“Report of the Acting Librarian, February–November”²⁸⁾本書で引用した“How the Library is used in the Evening”は別資料。
- (284) 立教大学「昭和十六年度私立大学年報」(『昭和十六年度起学事年報報告綴(一)』)。
- (285) 「米国から洋書四千冊／図書館着々充実」(『立教学院学報』第六巻第一号、一九四〇年一月二八日。前掲『メーザライブラリー資料集』九五頁)。
- (286) 「図書館だより」(『立教学院学報』第六巻第二号、一九四〇年五月二八日。同右、九七頁)。
- (287) 「遠山郁三日誌」一九四〇年四月二日条(『遠山郁三日誌』三頁)。
- (288) 「図書館の新機軸／本邦最初のオープン制」(『立教大学新聞』第一号、一九四二年一月一日。前掲『メーザライブラリー資料集』一〇四頁)。
- (289) 前掲「再び図書館に呈して猛省を促す」二七頁。
- (290) 「図書館」(『立教大学新聞』第二六号、一九四三年一月一〇日。同右、一一一頁)。
- (291) 「図書館雑報」(『立教学院学報』第七巻第八号、一九四一年六月七日。同右、一〇一頁)。
- (292) 閲覧課「開館日数入館者数貸出冊数統計」一九四七年六月五日(『貸本圖書月表』立教池袋図書館所蔵)。
- (293) 前掲「貸本圖書月表」。

(注 第三章)

- (1) 内閣府『災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 一九三三 関東大震災』(内閣府‘二〇〇六年’) http://www.bousai.go.jp/kyokuk/kokun/kyokunokeshou/rep/1923_kanto_daishinnsu/index.html
- (2) *The Spirit of Missions*, October 1923, pp. 645–646.
- (3) *SM*, October 1923, p. 710.
- (4) *SM*, October 1923, pp. 647–651.
- (5) *SM*, October 1923, pp. 653–657.
- (6) *SM*, October 1923, p. 693.
- (7) *SM*, November 1923, pp. 717–721.
- (8) *SM*, October 1923, p. 693.
- (9) *SM*, October 1923, p. 694.
- (10) *SM*, October 1923, p. 695.
- (11) *SM*, October 1923, pp. 696–697.